



愛光NEWS

2025年11月

2025(令和7)年12月26日発行

(編集) 愛光本部

(TEL) 043-484-6391

(HP) <https://www.rc-aikoh.or.jp/>

今号の愛光ニュースでは、各事業所・部門における多彩な取り組みを通して、「利用者の尊厳を守る支援」「安心・安全な生活環境づくり」「地域とのつながり」を大切にする愛光の姿をお伝えします。権利擁護研修での学びや、日々の食事・生活支援の中で気づかされた配慮の重要性、事故防止や防災への取り組み、行事や地域活動を通じた交流の広がりなど、現場ならではの実践が数多く紹介されています。一つひとつの取り組みは小さく見えても、利用者一人ひとりの安心や笑顔につながる大切な積み重ねです。本号を通して、職員の思いや工夫、そして愛光が目指す支援のあり方を感じていただければ幸いです。

□事業経過など（2025.11.1～）

4	火	業務執行会議
6	木	権利擁護研修
10	月	2年目交流会
14	金	5S研修
17	月	佐倉圏域事業部実績会議
18	火	業務執行会議
19	水	地域食堂ともいき
20	木	コミュニケーショントレーニング
22	土	山王ゼロ円バザー
25	火	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務プロジェクト/後援会運営会議会議
26	水	経営戦略会議/山王小福祉学習
27	木	高齢者福祉事業部実績会議/本部実績会議
29	土	理事会

■月報から

□ 権利擁護研修（本部）

11月6日（木）コンプライアンス委員会主催による権利擁護研修を実施し、職員・実習生39名が参加しました。グループワークでは、「これって虐待？」をテーマに、食事や入浴などの事例を示して日常のケアに潜む「不適切なケア」について活発な意見交換が行われました。また、滑川監事より、「養介護施設従事者等による高齢者虐待防止～なぜ虐待がおこるのか～」について講義をいただき、権利擁護について理解を深めました。本研修を通じ、職員一人ひとりが利用者の尊厳を守る意識を再確認し、日々の支援を振り返る実りある機会となりました。

（本部長 佐藤 達弘）

□ 寿司の美味しさ（栄養管理室）

11月6日は寿司職人が来苑して寿司を握ってくれる待ちに待った日であった。マグロ、たい、サーモン、ほたて、ねりうめ巻など合計9貫ほど盛り合わせた。ほたて貝柱は昨年より1.5倍以上値上がりした。やむを得ないためサイズを4S→5Sと一キロに入るサイズが小さく個数が多い商品に変更した。小ぶりであったが貝柱の美味しさはしまった身に含まれていた。普段は粥でもいなり寿司や炊き込みご飯などは食べたい方は複数いる。

ある方は毎日朝に献立を見て『今日は炊き込みご飯を食べたい。』と職員を経由して自分に連絡がくる。フードサービスのスタッフよりある利用者の寿司をハサミで切ろうとしたら怒られてしまったと、誤嚥の事故にならないようにと事前に小さく切ってしまう配慮ではあるが、ちゃんと利用者に説明をして『半分に切ってもよいでしょうか？』又は『もう少し小さく切ってもよいですか？』と、言葉を交わさなくてはいけないと改めて思った。

美味しいお寿司を事故がないようにスタッフ、看護師が注意深く食事介助を行った。利用者から『美味しかったわ』と、笑顔でお話がけてほっと、不安から解放された気持ちになった。

（管理栄養士 江口 貴子）

□ 防犯カメラ（ルミエール）

7月から施設内に防犯カメラを10カ所設置して4カ月が経過した。設置するまでは半信半疑であったが、この4カ月だけで防犯カメラの効果をたくさん実感することとなった。ご家族に利用者の事故報告をする際、ほとんどは病院への受診を要する事態であるにも関わらず原因がわからないことが今までたくさんあり、ご家族からも原因が不明であることはないようにできないだろうかとお話を受けることが多かった。ご家族からしたら、「ケガをして病院に行きました。なぜケガをしたのかはわかりません。」と説明を受けたらご理解は得られないと思う。最低限共用部分にカメラを設置したことで、職員がいない場面での転倒や接触が防犯カメラでわかることで注意するポイントがわかったのは大きな収穫である。すべての事故をゼロにすることはできないが、ゼロに近づけるよう気を引き締めて今後も利用者の支援にあたっていきたい。

（ルミエール課長 原 宏之）

□ おひさま祭開催（めいわ）

今年度もあっという間におひさま祭当日を迎えることとなり、利用者、職員一同感慨深い気持ちでこの日を迎えました。当日はご家族の皆様をお招きし、この一年間で積み重ねてきた思い出いっぱいの行事をご紹介しました。春のお花見に始まり、鉄板焼きイベント、納涼

祭、夏休みのさまざまな企画、敬老会など…振り返ると数えきれないほどの行事がありました。クイズ形式で一年を振り返る中で、「そういえば、そんなこともあったね」「また来年もやりたいね」と、次への楽しみが自然と湧いてきました。めいわ太鼓班の皆さんによる演奏も披露し、今年一年の活躍を改めて紹介しました。地域での発表の機会が増え、メンバー一人ひとりが誇らしげに演奏する姿が印象的でした。10月にはコロナクラスターを経験しましたが、それを乗り越えて無事にこの日を迎えることができました。会の最後には、「来年も元気に頑張ろう」という思いを新たにし、笑顔で締めくくることができました。これからも風邪などひかずに元気に活動し、たくさんの思い出や経験を積み重ねていけることを願っています。

(めいわ 課長 日野 史生)

□ 全国盲重複研大会での発表（リホープ）

当月に開催された第44回全国盲重複障害者福祉施設研究大会において、当施設は「意思決定支援 これでよかったかな？」と題し、M様の看取り支援を通して実践した意思決定支援の取り組みを発表した。ご本人が長年慣れ親しんだ施設で、最期まで穏やかに生活を続けたいのではないかという職員の思いを出発点として、家族や嘱託医と話し合いながら、看取り体制を整えていった過程について報告した。病院への移送を前提とした従来の流れではなく、本人の望む暮らしを大切にした意思決定支援の在り方を問い合わせ直す内容であった。質疑応答では、「施設での看取りをどのように決定したのか」「本人・家族・医師の意思の比重はどう判断したか」「急変時の対応体制はどう整えたか」など、実践面に踏み込んだ質問が寄せられた。特に、行政説明で招かれていた厚生労働省職員が分科会に参加されており、質問があったことで、国としても障害者支援施設での看取り支援の重要性を強く認識していることを実感した。突然の質問に頭が真っ白になる場面もあったが、これまでの取り組みを振り返りながらしっかりと回答することができた。また「看取りへの取り組み・支援」に対する報酬面での評価について、次回の法改正の議論に挙げてほしいことをお願いした。障害者支援施設における看取り支援は、今後さらに求められる大きなテーマである。今回の発表を通じて得られた気づきを職員間で共有し、本人が安心して最期を迎えられる支援をより一層探求していきたい。

(リホープ 副施設長 麻生 知明)

□ 現場の工夫が生む広報効果と後方支援の重要性（根郷通所センター）

高速道路のパーキングエリアに設置する「i-koubou!」のポップ広告の写真撮影が行われた。今回の「高速道路と福祉をつなぐCSR活動」の依頼は、新たな可能性につながる好機であると捉え、社会福祉法人愛光の名前を前面に打ち出したポップ広告の制作を進めている。立地的にも重要な広報の場であることを踏まえ、ポップ広告の作成は実績のある「株式会社ハタジルシ」に依頼した。一方で、広告の写真として使用される作業場の雰囲気づくりは、現場の重要な役割とし、環境整備に関する意見を求めたところ、古くなったテーブルクロスを新調し、作業用エプロンを揃えて統一感を出すという提案が挙がった。しかし、現場からは「費用の捻出方法はどうするのか」という声も寄せられた。これらの購入費用は約4万円であり、多肉植物の寄せ植えの利益（1個あたり200円）で賄う場合、200個の販売が必要となる。経費を切り詰め、可能な限り節約している現場にとって、4万円は大きな負担であり、費用の捻出先に敏感になるのは当然であろう。なお、酒々井パーキングエリアで障害者

施設の商品横にA4 サイズのポップ広告を設置した場合の費用対効果はあくまでも仮説ではあるが、広報価値や法人ブランド価値の向上だけでも一定の効果が見込まれる。さらに、社会的評価や人材確保、地域連携の効果を加えると、数倍になるという試算もある。今回のポップ広告は、法人本部の広報活動とは異なり、現場の努力がそのまま反映される、「現場発の草の根広報活動」とも言える。広告に映る作業場の様子や陳列された自主生産品は、法人の姿勢や取り組みがダイレクトに伝わり、受け手の印象に大きく影響するため、費用面を含め、状況に応じた柔軟かつ臨機応変な対応が求められる。パーキングエリアでの販売ブースの獲得と販売活動の継続は、職員と利用者の努力の賜物である。現場の取り組みを支える後方支援がなければ、こうした地道な活動は、現場の疲弊と共に失われかねない。現場の挑戦に応える体制を整えることで、疲弊を防ぎ、モチベーションを高めることで、商品の品質向上と更なる広報効果も期待できるだろう。さらに、こうした取り組みの積み重ねは、利用者の権利擁護（参加の機会の拡大や社会的評価の向上など）が一層進むだけでなく、職員にとっても成長の場となり、支援環境の好循環につながると考えている。

(根郷通所センター 所長 菊地 晓生)

□ 避難訓練（山王の家）

17 日 今年度2回目の訓練を実施。宿直者と世話人で地震後2階浴室から火災発生する想定で訓練を行った。今回は宮前の家の管理者も見学。利用者の避難自体は居室のヘルメットをかぶり、職員の声掛けに応じスムーズに行えた（ヘルメットの被り方については今後も練習が必要）。消防への通報訓練も行ったが建物の構造等想定外の質問に慌てた面はあったが、こうしたことの積み重ねで必要な情報・手順をマニュアルに反映し、精度を高めていきたいと思う。終了後の考察で、消火器の場所、大きな家具の固定、避難誘導完了の目印、職員間の連携等について意見があげられた。

(山王の家 岡本 綾子)

□ 新しい生活が始まって（佐倉市よもぎの園）

4 日からグループホーム『宮前の家』が動き始めた。まずは入居者、世話人、宿直者が無理なく生活が始められるよう、一週毎に入居者を増やすスタイルでスタートした。初日は3名の入居者が入り、よもぎの園の職員（山王の家での宿直経験あり）を宿直に配置した。皆、新しい生活に戸惑いもあるだろうが、新しい生活を楽しんでほしい。宮前の家で生活する入居者の8割はよもぎの園の利用者となる。日中の活動（よもぎの園）の場について職員は把握しているが、家での生活についてはわからないことが多い。これから先は宮前の家でよもぎの園（就労支援の場）とは違った関わりがはじまるが、「行ってきます」「お帰りなさい」と自然な会話が生まれるアットホームなグループホームになってくれればと思う。よもぎの園に通いながら生活できるグループホームが近隣に開設できたことについては愛光が指定管理を受託した当時から聞かれていた“親亡き後の不安”という課題の答えの一つになつたかなと考える。

(よもぎの園 近藤 真一)

□ 日常生活の定着を目指して（宮前の家）

10月に落成式を終え、11月4日より段階的に入居者の受け入れを開始した。受け入れを進めるなかで、体制側の課題、入居者への支援課題が浮き彫りとなった。受け入れを進める中で、支援定着の鍵は、まず「入居者の日常生活を深く理解すること」であることに気が付いた。管理者として、ジョーの家をイメージして支援を始めたが、すでに「入居者のペース

に合わせた支援」が定着しているグループホームと新設のグループホームでは勝手が異なり、ゼロから作り上げることの難しさを痛感した。入居者一人一人に安心した生活を提供するためには、入居者一人一人の日常生活のルーティン、課題を把握し、これらの情報を職員間で共有し、自立した生活を支援することが必要である。しばらくは、入居者の行動パターンを把握しながら、宮前の家の生活が安定できるように、チーム一丸となって支援に取り組んでいきたい。12月1日には、10名満床となる予定である。（宮前の家 高橋 健）

□ 産業大博覧会 2025(アシスト)

今年も11月8日・9日にかけて草笛の丘で「産業大博覧会」が開催された。今年で4回目の参加のため、委託相談支援事業所の行事としてすっかり定着してきている。今年は障害福祉課が毎年12月に行っているパラスポーツの啓発活動の要素も取り入れるとのこと、パラスポーツの「フライングディスク」の体験コーナー設置、また福祉のブースが近くに固まっていることを踏まえ、毎年行っている福祉クイズ・パラスポーツ・各福祉事業所それぞれにスタンプを置き、スタンプラリーの要素を取り入れた。9日はあいにくの雨ではあったが、2日間通して多くの方にご来場いただき大盛況であった。スタンプラリーを取り入れたことで、福祉事業所のブースに足を運んでいただく機会にもなり様々な形で福祉をアピールする良い機会になったのではないかと思う。今後も地域の方に福祉を知ってもらえるような機会があれば積極的に参加し、より多く地域とのつながりを持てるようにしていきたい。

（アシスト 小平 和俊）

□ 26年目の大規模修繕（はちす苑）

はちす苑が開所して26年目となった。これまで、給湯、エアコンの大規模な取り換え工事は行ってきたが、内装や外壁、屋根の経年劣化による改修工事は行われていなかった。今年度より漸く予算が付き、今年度は内装工事、次年度は外壁と屋根の補修、塗り替え工事が予定されている。はちす苑の内装は、特に床の汚れが顕著に見られている。床はコルク材でできているので、汚れが染みついた状態となっている。清掃業者のポリッシャーでも汚れ落ちは十分ではなく、暗く薄汚れた状態に見えてしまっている。今回は、コルクの床の上にフロワーマットをかぶせて施工している。明るい色合いとなっているので、施設内の雰囲気も明るいものになった。壁は、淡い肌色で和紙を使用したような模様となっている。特養の各街は壁の一角が「レンガ模様」や「メルヘンチックな木立」となっており、それがアクセントとなっている。個人的には、今回の工事が完了すると、見学者に「25年たってしまったので・・・」と言い訳をしなくて良くなったのは、誠にありがたいことである。

（はちす苑課長 桐 直芳）

□ 今年で5年目！順天堂大学学生企画 としとらん塾開催

（佐倉市南部地域包括支援センター）

毎年恒例になった順天堂大学スポーツ健康科学部 松山毅先生のゼミ学生企画による「としとらん塾」が開催された。今回は3回コースで、場所は南部地域福祉センターB棟の研修室で行われた。毎回、大学生は12~15名、高齢者は20名前後の参加があり、研修室が活気に溢れていた。1日目は「脳トレ」、2日目は「身体を動かす」、3日目は「みんなで楽しむ」というテーマで行った。時にはチーム対抗でゲームを行ったり、頭や身体の体操を取り入れたりするなど、大いに盛り上がった。このとしとらん塾は、学生と高齢者の交流の場と

なっているため、毎回楽しみに参加してくださっている方も増えている。今回も終了した後も学生と参加者がお互いに声を掛け合っておしゃべりをしていたのが印象的だった。学生にとっては、3年生からこの事業に参加し、4年生でリーダーとして企画を考える機会にもなっている様子で、打ち合わせ段階から前年の内容に加えてより面白い内容にしようという意見も見られていた。また来年、楽しみながら介護予防ができる企画に期待したい。※当日の様子はブログにも載せていますので是非ご覧ください。

(佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子)

□ 1, 2歳児対象ベビーマッサージ 「親子で楽しむやさしいスキンシップあそび」

(佐倉市南部児童センター)

1~2歳児にとってのベビーマッサージは、活発に動く時期でも、やさしいタッチで心と体のバランスを整える効果があるとされている。今回は講師の飯泉久美子氏を招き、今年度2回目のベビーマッサージを開催した。前回は0歳児対象だったが、今回は動き回る子どもたちが対象だったため、落ち着かない様子も見られた。定員いっぱいの15組が参加。部屋が広かったこともあってか、少し騒がしい雰囲気になった。次回は定員を減らし、講師の声や目が届きやすい小さめの部屋で実施し、参加者の満足度を高められるよう工夫が必要だと感じた。いずれにしても、保護者からの関心が高く、反響の大きい企画であることに変わりはない。終了後、「小学生の子どもとの関わりが難しい」という母親の声に対し、講師は「朝に『いってらっしゃい』と声をかけながら、頭をなでたり肩を軽くたたいたりするとよい」とアドバイスしていた。親子のふれあいの大切さを改めて感じる機会となった。

(佐倉市南部児童センター 吉田 知加子)

□ 学級閉鎖（学童保育所）

寺崎小は2年生の1クラスが11月5日(水)~7日(金)学級閉鎖となった。該当者10名の利用が休止となった。月初はインフルエンザ罹患者が多数いたが中旬以降落ち着いている。登所時の手洗いを徹底している。また室内の換気、保湿に注意している。また、職員の各種感染症対応に関しての意識の高まりと確認点が上がり、安全計画の「感染症対策マニュアル」を周知することとした。

(学童保育所 斎藤 理江)

□ 「南部文化祭」の開催（佐倉市南部地域福祉センター）

11月1日~3日間、センター恒例の「南部文化祭」が開催された。前月に紹介したおり、陶芸品、編み物、書道、七宝焼き、絵画、木彫り作品、生け花、絵はがきの水彩画などを各部屋に展示、披露された。「南部文化祭」は、開催に向けて多くの利用者が来所するため、必然的に地域福祉センタースタッフとコミュニケーションを取ることができるメリットがある。スタッフが利用者の作品展示を手伝う際に「とても良い作品ですね・・」と一声かけるだけでも喜ばれ、作成時の苦労話を聞くことができるなど、お互い文化祭を盛り上げる良いきっかけとなった。開催期間中には、今回の文化的活動の参加団体は来館し、皆で作品を見て回っていたが、その他の団体活動はお休みになり、全体の来館者は少なかったため、次回は開催方法を工夫してみたい。

(佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人)